

## 北方領土「ビザなし交流」に参加して

熊本県自衛隊家族会事務局長 光永 邦保

この度、国が主催する北方領土訪問団に加わり、国後島・択捉島両島を訪問させていただきました。7月6日から5日間という短い行程ながら、大変貴重な体験をすることができました。紙面をお借りして所見を披露致します。

### 訪問団の一員となって

今回の訪問団は総勢61人。まさに国を挙げての蒼々たる顔ぶれでした。私は、自衛隊家族会という看板を背負ってこの中に加えていただいたことに大変感激しました。

地方の家族会で活動していると、全国組織としての活動の広がりを実感することはまずありません。「署名活動はいつまで続けるのか」という質問が寄せられることも度々です。こうした思いを払拭するような今回の訪問体験でした。

### 島の印象・人の印象

北方領土の印象を問われてまず目に浮かぶのは、その圧倒的な自然です。船から見えた国後島の爺々岳（ちゃちゃだけ）など各地に点在する山々、カルデラを思わせる入江の形、広大な白樺の樹林帯と路傍に群生する蕨（ふき）の大きな葉っぱなど、まさにそれらは私が10年あまり過ごした北海道の景色に連なるものでした。

択捉島で温泉に入る機会に恵まれましたが、同行した専門家の分析によれば「日本に最も広く分布する温泉のタイプ」とのことで、様々な観点から日本列島の特色を随所にとどめているように思いました。

その四島に、戦後70年以上にわたって暮らし、すっかり土地に定着した多くのロシア人を目の当たりにしました。これも受け止めるべき現実の光景です。

驚いたのは、ここ数年で急速に道路等のインフラ整備が進んでいることです。島は、今や共同住宅や公園などの建設ラッシュでしたが、こうしたハード面ばかりではありません。



サハリン州では、2番目の子どもには補助金が出され、3番目の子どもには宅地用の土地が提供されるという説明を受け、ロシア側の並々ならぬ意欲が伝わってきました。

現地のロシア人との交流も忘れがたいものでした。にわか仕立てのロシア語で、道行く人に挨拶をすると、皆、快く返事をしてくれました。公園で遊ぶ子どもにカメラを向けると、嬉しそ

うに近寄ってきて笑顔を披露してくれました。

さらに、昼食会に招かれた家庭では、まもなく大都市サンクトペテルブルクに嫁ぐ娘さんとそれを気遣う母親とのほのぼのとした雰囲気味わいました。一見不愛想に見えますが、親子関係や家族への想いなど、日本人の心に通ずる共通点をいくつも見出すことができました。

交流を重ねればきっと友達になれる、そして同じ土地に住めば良き隣人として暮らせるのではないかと強く感じました。

## 北方領土問題の行方と私たちにできること

現在、この北方領土問題を取り巻く環境が大きく変化しつつあります。

その1つは、元島民の方の高齢化です。すでに6割の方々が他界され、残された方の平均年齢は81歳になります。「住んでいた土地に帰して欲しい」という人道的な訴えだけで返還運動を継続することが難しくなっています。

もう1つの変化は、ロシアが四島の開発に積極的に乗り出していることです。昨年12月の日露首脳会談において、国境問題を棚上げし、「共同経済活動」の推進が合意されました。

私たちの訪問に先立ち、官民の調査団が派遣されました。その一方で8月28日、メドベージェフ首相が北方領土を含む地域を「経済特区」に指定し、日本のみならず中国、韓国にも門戸を開く姿勢を示しました。

「共同経済活動」は、ともすれば「四島におけるロシアの主権を黙認することになりかねない」として最大限の警戒が必要ですが、加えて、我が国の「了解なし」で四島に中国や韓国など他国の利害を持ち込むことは絶対にあってはならないことです。

こうした厳しい情勢に目を向ける必要がありますが、私たちにできることは限られています。まず「顔が見える交流」を継続していくことです。交流の継続は「日本こそが信頼に足るパートナーである」ことをロシア人に分かってもらうために必須です。

## 返還への強い思いを署名数で

そして、北方領土返還要求の強い思いをロシアに伝え続けることです。返還への強い思いは「圧倒的な署名の数」によって達成されます。

今回の訪問で得た思いを、是非とも多くの会員の皆様に共有していただき、北方領土返還要求運動に今後ともご支援とご協力を賜りたいと思います。自衛隊を支える思いで国を支えていきましょう。